

和歌山大学教育学部
2022年度 共同研究事業

「和歌山大学を中心とした ESD for SDGs コンソーシアム推進」

研究代表：教育学部 岡崎 裕 和歌山大学教育学部附属中学校 山口康平
和歌山大学教育学部附属小学校 中山和幸 和歌山県立箕島高等学校 山田江理奈 中井保奈見

本研究は和歌山大学教育学部と同附属小・中学校、及び和歌山県と和歌山県周辺域に所在する地域の諸学校との連携のもとに、『21世紀の社会を生きるうえで必要となる資質・能力』（21世紀型能力）の育成を目指し、SDGs 推進を目指す共同研究のための枠組み「和歌山 ESD for SDGs コンソーシアム」を組織し、ここを起点として研究の成果を地域全体で共有することにより、教育の質的向上を図ろうとするものである。研究活動に着手してから既に3年以上経過しているが、この間、本研究は他の多くの社会活動同様、コロナ禍による影響を大きく受けてきた。参加各校における実践的研究は確実に進展しているものの、研究の本旨でもある、実践各校のネットワーク化とそれぞれにおける成果の共有については残念ながらまだまだ途半ば、といったところである。

2021年度の研究報告においても言及したが、和歌山大学は第3期中期目標において「附属学校3校が連携し、『多様な特性のある児童・生徒が共に学びながら』（インクルーシブ教育）、『21世紀の社会を生きるうえで必要となる資質・能力』（21世紀型能力）を高めるための教育について学部・大学院との共同研究を行う。その成果を、和歌山圏域における地域特性を活かした『持続可能な社会の担い手育成』（ESD）のための先進的教育モデルとして、地域の学校に提供する。」と宣明している。「ESD」は”Education for Sustainable Development”であり、直訳すれば「持続可能な開発のための教育」である。一方本研究のテーマである「SDGs」は”Sustainable Development Goals”、即ち「持続可能な開発目標」である。「（到達）目標」と「教育」と言う関係性は、言い換えれば「目的」と「方法」の関係にある。私たちの文明が未来に向けて持続的に「生き続ける」にあたり、個人としての「自己実現」や「社会化」に留まらず、民主主義社会における「市民」としての認識のもと、「教育」あるいは「学び」が、これにどのようにして貢献してゆくのか。いままさに「公」教育のあり方が問われているのである。この論議の詳細については稿を改めるとして、ここでは、SDGs 共同研究の2022年度の成果について報告する。

今回、共同研究としてSDGsに取り組んでいただいた学校は3校となる。まず、最初の和歌山大学附属小学校では、56F（5、6年生による複式学級）の「総合的な学習の時間」の取り組みである”CHANGE”の一環として、海洋生物の飼育を通して海洋資源の保全と自然環境保護を学んだ「わたしたちの暮らしとSDGs」が報告されている。62時間配当による本単元では、学習対象によってステップを3段階に分け、ステップ1では「ヒラメ」、ステップ2では「イサキ」と「クエ」、そしてステップ3では「アマモ」に関わる学習に取り組み、それぞれの段階において教室での飼育から最終的な放流（植え付け）までを一つの流れとして、段階を追って学びが深まってゆくような構成がなされている。和歌山市内（加太）に所在する和歌山県栽培漁業協会北部栽培漁業センター等、専門機関の協力も得ながら本格的に進められた取り組みでは、途中病気によって飼育中の魚が死んでしまったりといったトラブルを経験しつつ、最後には生物を海に返すことによって、自然の循環や生態系のバランスを学んでゆく。飼育中の魚が死んで

しまうというようなことは、実は自然界においては起こりうることであり、子どもたちの感想には、そうした経験を通して感じられた「生命」の喪失感と、そこにある畏敬の念が感じられる。実は、本実践において想定されていたキーワードは「Well Being=良く生きる」であり、それは生き物の飼育とその放流を通じて、海洋資源の保全に止まらず、子どもたちが自身を含め「生命」と直接向き合うことがテーマなのであった。生物の飼育を通じた自然環境への想い、そしてさらにその先にある命の対する畏敬を育てる実践として、価値のある実践である。

続く同附属中学校における実践報告は、2019年度から2021年度の3年間にわたって行われた「和歌山×SDGs～持続可能な社会の実現をめざしたプロジェクトを企画・実施せよ！～」の包括的なリポートである。過去の本共同研究のリポートにも報告があるように、SDGsの持つ多極的な特性が、地域社会にある多様な切り口と符合し、中学生自身による企画と調査、そして研究と報告に至る「探究的」な取り組みとなっている。中学校の3カ年を重層的に俯瞰し、それぞれの発達段階と強化カリキュラムとの整合性なども考慮しつつ、主体的・対話的で深い学を実現している。そうした学びの結果、子どもたちは「テレビで見たような」SDGsに対して、自身の活動を通して積極的に関わり、さまざまなプロジェクトを「やり切っ」ている。また、地域社会に直接関わることで、中学生としての自分と社会の実装を重ね合わせながら、実感を持って自身の成長を実感するのである。今年度の報告では、各プロジェクトの総括と同時に、プロジェクト全体の総括も示されている。それぞれの詳細リポートについては同校のホームページにも掲載されているので、是非ご覧いただきたい。

今年度は上記2校の実践に加えて和歌山県立箕島高等学校からの実践・研究報告も掲載している。和歌山県立箕島高等学校では、外部からの研究活動資金も得ながら、やはり「総合的な学習の時間」としてSDGsに関する学習活動に取り組んでいる。「『有田市民』『和歌山県民』『日本人』といった枠にとらわれることなく、地球に生きる一人の地球市民であるということを感じ、地球の環境や地球に生きる他の人々を思いやることのできる生徒を育成する」をコンセプトに、グループによるSDGsの各項目に関する調査研究、SDGsに向けた取り組みを進める企業から学ぶ探究学習、そして活動全体を総括するイベント「地球市民 Week」へとつなげる、年間を通じた取り組みとなっている。昨年度実施された報告会では、それぞれの高校生チームによる等身大の研究発表が行われ、今後のさらなる発展に向けて大いに期待が膨らむ、楽しさに溢れた報告会であった。

さてここで、もうひとつ本共同研究に連なる和歌山県の学校によるSDGsの取り組みについてご紹介したい。和歌山県では南紀熊野ジオパーク推進協議会と県庁ジオパーク室が中心となり、自然環境に関心の高い県内の中学・高校生を対象として「南紀熊野ジオパーク探偵団」を組織している。「南紀熊野ジオパークをフィールドとした探究活動を通じて得るあらたな気付きをもとに、”think locally, act globally”（地域で考え、地球規模で行動）の視点に立って、地元にある社会的な課題の解決と未来に向け考える人を育てる」ことを目指し、海（白浜町志原海岸、新宮市三輪崎海岸）や山（古座川町北海道大学和歌山研究林）におけるフィールドワークと、それらを通して得られたデータをそれぞれのチームで分析、考察し、最終的に科学的成果として発表する取り組みを進めている。参加者の多くは和歌山県内の高校に通う生徒であり、本質的にSDGsに向かう教育活動である。これまでの実践に関する報告は、豊富な写真データを含めてそれぞれのウェブサイトに掲載されているので是非ご覧いただきたい。さらに、今後に向けてはここに関わった各高校の教員・生徒の皆さんにも合流を呼びかけ、和歌山県のSDGsに向けた取り組みとして、より充実した研究体制の整備を図ってゆきたい。